

ビジネス日本語教育におけるシニアサポーター活動の継続と課題

—シニアサポーターの視点から

堀井恵子・種村政男(武蔵野大学)

【1. 研究背景】

ビジネス日本語教育において、オーセンティックなビジネス現場との結びつきは欠かせない⇒ビジネス現場は忙しく、継続的な連携を取ることが難しい⇒2008年からビジネス日本語教育にシニアサポーター(以下、SS)を導入

SS導入の目的(2008):①学習者(留学生)が日本語を使って主体的/自律的に自己実現するために学習者の中から可能性を引き出しそしてサポートする、②成人の日本人とのインターアクションを増やし、異文化調整能力を育成する、③日本語教師が行う際に不足しがちなビジネス現場の事情や企業文化についての知識と対応能力を補う

SSの要件:2008年・2009年「大学の留学生をサポートするボランティアのための講座」、2008年-2010年文化庁事業「生活者としての外国人」のための日本語教育事業「仕事をする外国人をサポートするボランティア育成講座」受講生延べ70名の内武蔵野大学シニアサポーターとして登録した者延べ26名から活動開始

【2. 先行研究】

堀井(2015):PBL授業におけるSS活動について、学習者の振り返り記述から、SS活動に関する学習者の気づき・学びを分析、PBLにおけるSSの意義として5つのカテゴリーを抽出。

- ①ビジネス(社会)経験(自分たちの非現実的なアイデアがアドバイスによって現実的なものになった)、②リアリティのあるコミュニケーション相手(ビジネス経験豊かな日本人と話す機会は今までなかった、シニアの方なのでできるだけ敬語を使うようにした)、③日本人の視点の理解(企画が日本の文化に合うかどうかの視点が得られた)、④創生(SSと私たちの考え方を合わせることで良いアイデアが生まれた)、⑤サポート・スカフオールドイング(安心感がありました)

【3. 研究目的】

SSに質問紙調査を行い、SSの側からみたSS活動の良さ、課題について探り、SS活動が継続してきた要因と今後の課題を探る。

【4. 調査概要】

質問紙調査実施時期: 2020年1月10~20日
・回答シニアサポーター:6名(男性5名・女性1名)
・年齢:60-70歳:3名、71歳-75歳:2名、76歳以上:1名
・経験年数:7年:3名、6年:1名、5年:1名、4年:1名
平均:6.0年

【5. 結果】

- ①自分の経験を生かせる喜び
 - ・会社や社会経験を活かして社会参加しているという自負と安心感を持っている。
 - ・シニアの私が必要とされることが嬉しく感謝している。
- ②留学生と接することで気づき・刺激を得、エネルギーがわく。
 - ・自分とは年齢差が50年で外国からの留学生であることに起因すると思われるが、フィーリング、考え方、生活態様・服装・生活感覚等々が自分とは異なることが単純に面白く、また考えさせられることも多い。
 - ・授業のテーマに関係した、また、留学生の出身国のニュース・記事に注意するようになり、話題が豊富になった。
- ③生活の張り
 - ・毎週授業に参加し、レポートを書くことで、定年後の日常生活にリズム・アクセントができることが良かった。
 - ・休まないため健康管理も行っている。
- ④シニアサポーター同士の仲間の楽しさ
 - ・それぞれ各人の過去の職種や人生経験が全く異なる人たちなので話をして面白く興味が尽きない。
- ⑤課題
 - ・喋り過ぎないように意識はしているものの、結果喋りすぎてしまう時もあり気をつけなければいけないと反省しています。
 - ・母語で話し合っているときどのタイミングで日本語への転換を促すか難しい。
 - ・IT化の速さ・高度化に焦りを感じる。
 - ・長年続けているのでSSの若返りが必要では？



コーディネーターから

1. SS/大学(教員)/留学生の3者が利点を感じられること
 - ・特にSSにとっては教師・留学生からの「SSがいて良かった」の反応(FB)が大事
2. 教員との目的や価値観の共有
 - ・期初のオリエンテーション・ミーティングの重視
 - ・期末の振り返りミーティングで教員との意見交換
3. 今後に向けての課題
 - ・SS数の増員強化(できれば60歳代の新規加入)、教科内容の高度化へのSSの対応

【6. 考察】

このような活動は継続が難しいが、SS、留学生、教員の三方がそれぞれのメリットを感じられている点が継続の理由と思われる。「市民の社会参加」と「留学生の学び」が結びつく多文化共生にもつながる場という意味でもSS活動の意義を認識することができた。コーディネーターの役割も重要。

【7. 課題】

留学生、SSへの調査を行ってきたので、今後は、教員側からの意義と課題の調査を試みたい。

【参考文献】:堀井恵子(2015)「ビジネス日本語教育の課題再考—コース・デザインとPBL,シニアサポーター活用—」『ビジネス日本語教育の展開と課題』,pp.125-142、ココ出版 他